

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 竹内けん

挿絵 浮月たく

第一章

白い貴婦人

006

第二章

赤い髪の女海賊

049

第三章

激しい船中生活

092

第四章

敗北

122

第五章

海賊の根城

166

第六章

南海の覇者を夢見て

214

登場人物紹介

Characters



シグレーン

海軍提督。リカルドが憧れる、豊かな身体を持つ妖艶な美女。リカルドには優しく接するが、何か一癖ありそうな雰囲気漂わせる。



イシス

シグレーンの部下で、軍艦「南海の鷹」の女船長。クールで厳格な性格だが、理知的な魅力を持つ美女。

スカーレット

翡翠海で暴れ回る女海賊。イシスのライバル的存在で、性格も反対に明るく派手。身体つきも非常にグラマラスである。

リカルド

エトルリア王国の王子。海軍で身を立てる事を夢見る少年。

マリオン、マーサ、ジミー

「南海の鷹」に乗り込む少女水夫。

「やめろよ。ああ、やめて、お願いだから……」

初めは海の男らしく強気に出ようとしたリカルドだが、その声音はだんだん弱々しくなっていく。

少年は虚ろな目で熱い吐息を繰り返し、少女たちの手の内にある肉棒はどんどん質量と硬度を増していく。

処女娘たちはそれがいかなる事態の前触れなのか、まったくわかっていないらしい。瞳を輝かせて、刻々と変化する男根を興味深げに見入っていた。

リカルドは肛門や下腹部に力を込めたりしながら、必死に耐える。

「くううう……」

全身から汗がタラタラと流れる。弄ばれる性器を前方に突き出した形で背筋を弓なりとさせた。

少年の努力など知らずに、少女たちは無心に男性器を弄んでいる。

「も、もうやめて——ッ……」

悲痛な断末魔とともに、少女たちの手の中でかわいらしい男根がビクビクビクッと痙攣した。

「すごい、ビクビクしているう」

マリオンが感嘆の声をあげたつぎの瞬間だった。女の子たちの手の内にあつた肉棒の先

端から、白濁の液体が噴出する。

ドビュドビュドビュビュビュビュビュ——ッ。

男根の頭はまるで毒蛇が毒でも吐いているのかと思える勢いで周囲に首を振るい、マリオンの頭巾に包まれた頭から、健康的な顔、そして、胸元にかけて熱い液体がかかった。

マリオンは頭巾を被っていたからまだいい。マーサとジミーは、頭髪まで白濁液で染まっている。

三人娘はさすがにキョトンとした顔で、降り注ぐ熱い液体を浴びていた。

活火山のような噴射もやがては終わる。しばらくして、マリオンが口を開いた。

「ありゃ、これってばもしかして精液？」

「もしかしなくても精液以外には考えられないわよ」

紫色のローブにかかってしまった精液を見ながら、マーサもまたいささか気後れしたように応じ、ジミーはクンクンと小鼻をひくつかせた。

「すごい匂い。これが牡の匂いなんだ」

三匹の処女娘たちはごくんと生唾を飲んだ。それぞれ手にかかった精液の匂いを嗅ぎ、恐る恐る舌先に乗せてみる。

マリオンが顔を顰めた。

「わたしさ。魚の白子ってけっこう好物なんだけど、これって苦いし、あんまり美味しく

ないわね」

「それはあんたがまだ子供だつてことよ。お酒つてわたしたちが飲んでもあんまり美味しくないじゃない。でも大人は大好きでしょ。それと同じ。大人の女になったら、この若い子の精液つてやつは、この世で一番甘露な食べ物になるらしいわよ」

「ほんとかなあ」

マーサの説明に、マリオンは胡散臭そうに応じる。

そんな中、女の子たちに性を弄ばれた少年は、恥ずかしさと情けなさから逆切れしていた。

「もう、満足しただろ！ このことはイシス船長やほかのみんなには黙っていてやるから、ズボンをもとに戻してくれよ」

「うるさいな、もお、みんなに聞こえちゃうじゃない」

みんなに黙っていてやる、という言葉がまるで脅かされているように聞こえて、気分を害したようである。

なんとマリオンはいきなり短パンを脱ぎ捨てると、白いショーツを脱いだ。

頭髮と同じ濃紺の陰毛があらわとなる。

驚くりカルドや友達の視線を無視して、その脱ぎたての下着を、リカルドの口に押し込んだ。

「あ、そのままじゃすぐに吐き出しちゃうわよ」

マーサもまた短パンとショーツを脱ぐ。そして、下着の足の穴をリカルドの耳にかけ、まるでマスクのように装着してしまった。

「じゃわたしも……」

友人ふたりに触発されて、大人しい女の子ジミーまで、下半身を裸にしてリカルドの頭からかぶせた。

生暖かい脱ぎたての染み付きショーツで顔が埋まる。

三種類の匂いが混じってしまい、匂いの判別はできないが、若いからか、分泌物が多いらしく、なかなか強烈な牝臭だった。

目がチカチカするほどの性臭が、口の中はもちろん、鼻腔から肺腑に至るまでいっぱいになる。

男として屈辱的な姿なのだが、貪るように匂いを楽しむことを止めることができない。

(シグレーンのオマ○コとはぜんぜん違う匂いだ。あ、そっか、シグレーンはいつも香水つけてるから匂いがわからないんだ。これが生の女の子の匂いなんだ。ああ、潮の匂いがある)

シグレーンのフェロモンたっぷりの匂いが大好きだったリカルドだが、このいかにも海の女の子たちと思える匂いもまた、たまらなく好きになってしまった。

そして、目のまえにはシャツを胸上までたくしあげ、下半身を素っ裸にした三人の美少女がいるのだ。男根はたちまちのうちに復活した。

この情けない姿を、王宮にいるリカルドの近臣たちが見たら涙を流すだろう。

「おお、やっぱりかわいい顔していても、男の子よね。オマ○コの匂いが大好きなんだ」
少年を揶揄しながら、マリオンは男根を弄んだ。

「これってさ。いわば女にとってのクリトリスみたいなもんなんでしょ」

「たぶんね」

「なら、これ剥けるはずだよね」

マーサの同意を受けたマリオンはいきなり、亀頭を包む薄皮を剥き始めた。

「んー……っ！」

シグレーンに剥き癖を仕込まれているとはいえ、まだまだ空気すら刺激になってしまふ、幼いおちんちんである。ピリピリとした痛みと快感が紙一重で、赤剥けた粘膜が、どんどん膨張していく。

「おっ、剥ける剥ける」

マリオンは男の苦悶になど気にも留めず、面白そうに、包茎を剥いてしまった。

リカルドの逸物といわず、全身が心細げに痙攣しているが、そんなことは少女たちには気にならないらしい。

大人しいはずのジミーが歓声をあげた。

「うわ、綺麗なピンク色ね。これってば、ちよつと美味しそうかも。ねえ、ぼく、ちよつと舐めていいかな？」

「うぐっ」

口にショーツを入れられているリカルドが答えられるはずがない。しかし、大きく頷いていた。

シグレオンに仕込まれたのだ。この剥かれて痛いときに、女性の唾液のたっぷり乗った舌で舐められると、この上ない快感なのだ。

マリオンが剥きあげている亀頭を、料理人見習いはペロペロつと味見するように舐めた。一度精を吐いたばかりで敏感になっている亀頭の裏筋から穴にかけてを責められるのは、苦痛であったが、快感であった。

痛みが少しずつ和らいでいき、あまやかな快感だけが残っていく。

「あたしも、あたしも舐めたい」

「ジミー、わたしにも舐めさせて」

マリオンが右から、マーサが左から顔を近づけてきた。

ジミーは不満そうな表情を浮かべたが、友人たちにも場所を譲り、自身は裏筋を舐める。真っ赤に腫れあがった亀頭。左右と裏側から三人娘の舌がペロペロと舐める。



「オチンチンでオマ○コを力強くズゴズコってされたいの？」

リカルドが改めて確認すると、イシスはもう耐えられないといった様子で自ら腰を振り出した。

「ああ、早く、ズゴズコして、ズコスゴ、あああつ！」

すっかり快感の虜とらになってしまっているイシスの括れた腰を両腕で捕まえたリカルドは、お望み通りズンズンとリズムカルに突き動かす。

柔肉が摩擦され、愛液が押し出されてクチュクチュと音を立て、揺れてぶつかる陰囊まで愛液でべっとり濡れた。

後背位だと、手持ち無沙汰で女性の乳房を揉みたくなるのだが、自分からは揉まず、まずは質問する。

「おっぱいは揉んで欲しくない？」

「揉んで欲しいっ。お願い揉んでっ」

イシスは狂おしく訴えた。こうなってしまったら女軍人の鑑もただの牝。快感を貪らずにはいられない性獣に過ぎなかった。

リカルドは両腕を前に回して、制服越しに乳房を捕らえる。

ちようど手に収まる大きさだ。量感シグレーションに及ばないが、マリオンたちよりはよく育っている。熟れすぎず、若すぎず、食べごろのおっぱい、という表現が一番合っている。

る気がする。

服の上からモミモミと揉んでいたのだが、イシスには不満だったらしい。

「そんなんじゃダメ。もつと直接お願い」

わがまま我侷な女船長である。要望に応じてリカルドは、上着とブラウスのボタンを外した。

中は水色のブラジャーであつたが、リカルドの位置からは見えない。衣服をつけたままでは外すのが面倒なので、強引に引き下ろした。

手の中にすっぽりと収まる美乳は、指先に吸いつく。

(ちようど手に収まる。それに俯せだと量感が増すみたいだ)

リカルドはタポタポと弄びつつ、しこり立つ乳首をキュッキュッと扱いてやった。

「あ……、いい気持ちよ」

とろんとした声を出すイシスは、はるかに年下の少年に弄ばれる被虐感に溺れているらしい。

普段は威厳溢れる船長なのだが、ひそかにマゾっ気があつたのかもしれない。

(ウナジが色っぽい……。イシスのウナジがこんなに色っぽいって知っているのはぼくぐらいだよなあ)

優越感に駆られた少年は、夢中になって乳房を揉みしだき、腰を力いっぱい叩き込んだ。一突きごとにブシュブシュと愛液が溢れ、一引きごとにグチュグチュと愛液が掻き出さ

れ、肉袋まで濡らす。

「ああ……あッ、あたっているうっ、おまえの大きいのが奥に、んあッ……」
獸のように四つん這いになって、悶えているイシスがすごくかわいく見える。

「イシス、もうイっちゃうっ！」

「アアッ！　きて、中にきてください。中にきてください。あたしも、もう、もう……」
許可をもらったリカルドの腰使いはさらに激しくなった。鋼のような逸物は縦横無尽に踊り、女壺を掻き混ぜた。

若い体力に任せた高速の連続突きに、知勇兼備の女船長は陥落する。

「ひいひい、イックウウウウウウ」

頓狂な声を張り上げたイシスは、ガクガクと全身を痙攣させた。

そして狂おしく律動を繰り返し、膣内をキュッキュツと艶かしく収縮させる。

(し、締まるっ！)

旬の女が繰り出す絶頂運動のまえに、うら若い少年の逸物はひとたまりもなかった。
女穴の蠢動しゅんどうがそのまま男根の蠢動となり、快感が股間から背筋を抜け上がる。

「ぼくもイク——ッ！」

どびゅっ、どびゅっ、どびゅびゅゆゆゆ……

膣内に向かって激しく精液を撒き散らしながら、リカルドはピストン運動を繰り返す。

「あ、ああ、あああ……」

イシスは声もなく小刻みな痙攣と、膈内の収縮を繰り返し、リカルドの最後の一滴まで、搾り出した。

沈勇の女船長は砂浜にグッタリと沈み、リカルドはその背中に倒れた。ふたりの結合は自然と離れる。

代わりにリカルドは、俯せになっているイシスの下に潜り込もうとする。イシスが身を横にしてくれたから、ふたりはともに横臥して、リカルドは胸の谷間に顔を埋めた。

あの尊敬する船長を、身も世もなく悶えさせ、イかせてやった、という満足感に浸っていると、イシスの視線が海に向いた。自然、リカルドの視線も追う。

「シグレーション閣下から聞いているぞ。おまえは南海の覇者エトルリアと呼ばせたいそうじやないか。まったく生意気な奴だ」

言外にそんなところがかわいいと言いたげなイシスが、リカルドの瞳を覗き込んできた。「もう一度できるな」

「はい」

たったいま放ったばかりの肉棒に、元氣よく力を漲らせたリカルドが、今度は正面から犯そうとするのを、イシスが止めた。

戸惑う少年に、苦笑を浮かべた女船長は、頬を染めてあさつての方角に視線を向ける。

「そうがつつくな。せつかく海辺なのだ。そ、その、……今度は海の中でしよう」

「海の中で……？」

「そ、そうだ。し、してみないか。わ、わたしは一度してみたかったのだ」

どもりながら、頬を搔いたイシスは横目でチラリと窺ってくる。

女は見かけによらない。こんなまじめ一本槍な顔をして、そんな願望があったのか。

リカルドは考えたこともなかったが、言われてみると確かに一度は試みたいセックスではある。

起き上がったリカルドは肉棒を跳ねさせながら、急いで海の中に飛び込んだ。

南国の海である。太陽に焼かれた肌には一瞬冷たく感じて、すぐに肌に馴染む温度だ。海水に腰まで浸かったリカルドが見守るまえでイシスは身を起こそうとしたが、途中で足通しとショーツが膝までで止まっているのに気づき、脱ぎ捨てた。

これで下半身は丸裸。また、軍刀を海水に浸けたら錆びてしまうので外す。

さらに細い腹部の周りで緩いベルトのように留まっていたブラジャーも煩わしかったらしく外した。

青い上着と白いブラウスを羽織ったままだが、これは恥ずかしいから脱がないらしい。しかし、まえのボタンをすべて外しているから、乳房の膨らみの谷間や、お臍、それに黒い陰毛などが見える。

白い肌が眩しい。顔も険が消えて、親しみ易い表情になったせいか、離れて改めて見ると、つくづく素敵なお姉さまである。

「あっ！」

突如、小さな悲鳴を洩らしたイシスは内股になった。

軽く目を瞑ったイシスの内腿をツーッと流れ落ちたものがある。立ち上がったことで膣に注ぎ込まれた精液が溢れてしまったのだ。

「大丈夫ですか？」

「ええ、問題はない。ああ、しかし、知らなかった。おまえの温かいものがこんなに気持ちいいとは……。うふふ、いまならシグレン閣下の気持ちがよくわかる。これは癖になるな」

長い足の内側を膣から溢れるもので濡らしたイシスは、おぼつかない足取りで海に入ってきた。その細腰をリカルドは抱き締める。

互いの下腹部の間に逸物が挟まれた。

「んつく……。せつかくおまえに注がれた精液が全部海に洗い流されてしまうのは、ちょっともったいないな」

「そんなにお気に召したのなら、いくらでも注いであげますよ」

「そうしてくれ。おまえの熱い精液でいっぱい、いっぱい満たして……。くれ」

イシスは両腕でリカルドの頭を胸に抱いてきた。リカルドは自らの男根を持って、女の黒毛に覆われた股間をまさぐったが、姿勢的に無理があるから、なかなか上手くない。

リカルドの悪戦苦闘ぶりが面白かったのか、イシスが微笑してアドバイスをくれた。

「わたしの足を持ち上げてみる」

リカルドはイシスの左太腿を抱えるようにして持ち上げた。膝小僧が水面に出る。

「はう……っ！」

「どうしたんですか？」

「か、海水が入ってきた……」

女にとって、それがいかなる感覚なのかわからないが、かなり気持ち悪いことらしい。あのイシスの眉根が下がり、なんとも情けない表情になっている。

リカルドのほうはかまわず、腰を屈めると、イシスの女の谷間を下から突き刺す。亀頭さえ入れれば、あとは根元までズボリと収まる。

やっぱり、愛液のほうが海水よりも温度が高い。肉棒が温かく包まれる。

「うっ、あはっ、はあん……」

イシスは目を閉じたまま、喘ぎ声をあげた。リカルドの首を両手で強く抱き締めると、左足を曲げてリカルドの腰に絡める。ついで右足もまた腰に絡めてきた。

女船長の身体は完全に海水に浮いてしまった。

対面の立位。陸地でやろうと思ってもリカルドの膂力りよりよくでは決してできないが、海の中
ならばできる。

(うわ、すごい。おちんちん一本でイシスを持ち上げているみたいだ)

興奮したりカルドは、イシスの両の尻朶を両手でしっかりと抱いて、ズコズコと突きま
わした。

「ああ……っ！」

大海原に抱かれてのセックスに、イシスも興奮しているらしい。恥じらいもなく大きな
声を張り上げている。

女軍人としての仮面を投げ捨てて、純粹にセックスを楽しんでいる女の顔は美しかった。
男女の動きにあわせて海水がうねる。打ち寄せる波とは別の波紋が、ふたりの身体を中
心に広がっていく。

また、ときとして波に揺られて、思いもかけない方向に揺さぶられ、ふたりの肉がよじ
れる。

イシスが辛うじて纏う海軍の制服のボタンはすべて外されており、白い胸の谷間は見え
るのだが、乳首は左右の布に隠れている。しかし、海水に濡れたことよって、肌にはベッ
トリと張りつき、白いブラウス越しに、ピンク色の乳首がツンツと突き出ているのがわか
る。

パンツと張り詰めているのに、中が柔らかそうな乳房。決して大きいわけではないが、お腕を伏せたように美しい形状。それが海水に浮いて踊っている。頂きを飾る乳頭のしこりっぷりが見ていて痛々しいほどだ。

「はあっ、はあっ、あんっ……」

喘ぎつつ潤んだ瞳で見下ろしてくるイシス。その胸がプルプルと震えるたびに、彼女の願望が手に取るように伝わる。

舌なめずりをしたりリカルドは、満を持して、左手でイシスの腰を押さえながら、右手で、青い上着と白いブラウスをはだけた。瑞々しい張り詰めた乳房が姿を現す。

眩しいほどに白い輝きのある肌だ。乳首の色も初々しく、まるで何人なんびとにも犯されたことのない、穢れを知らない可憐な花を思わせた。

実際、イシスは性体験の豊富なタイプではないだろう。船乗りとしては足下にも及ばないリカルドだが、性体験は確実に上の気がする。

こんな美しい身体が、性の歓びを楽しまないなど、宝石を泥の中に捨てるようなものだ。エトルリア王国の損失、翡翠海の損失、ひいては人類の損失だ。とまで大仰に考えたりカルドは、この美しいお姉さまの骨の髄まで蕩けるまで、徹底的に犯しぬいてやろうと決心した。

まずは乳首にしゃぶりつく。

「う、うん……」

イシスが鼻を鳴らす。硬質の美貌が、気持ちよさそうに喘いでいる表情は、色っぽい。リカルドは、すっかり蕩けてしまっているイシスの顔を見上げながら、硬い乳首をチュウチュウと吸い、両手で尻肉をしっかり掴んで、肉棒のエラで膣壁をひっかくことを意識しながら、ゆっくりと抽送運動をする。

「あ、ああ……」

イシスの洩らす嬌声が少しずつ大きくなっていく。それに伴い身体のほうも、クネクネクネクネと動く。

「あああん、すごい、気持ちいい……気持ちよすぎる……ああ……」

イシスはあたりを憚らず嬌声を張り上げ、周囲の岩肌に残響させる。肉壁の締めつけがどんどんきつくなっていく。

自ら快感を貪ろうと腰を動かしてくるイシスは、まるで発情した猿のようで淫らだ。しかし、その普段とのギャップが男心をくすぐる。

いつしかりカルドは翻弄され、逆に追い詰められていた。

「ぼくも気持ちいい。もう、イキそうです」

「いいわよ。いつでも……わ、わたしも、もう……」

イシスもすでに限界に近いようである。惚けたように、唇を半開きにしたまま何度も頷

く。

それにしても、薄暗い船内でするセックスとは違い、物凄い開放感だ。

どこまでも続く翠の海の中。頭上には抜けるような蒼穹。

(これはぼくの海だ)

海洋国家エトルリアの王子であることを誇りにしているリカルドは、この美しい海が大好きだった。

そして、手中には尊敬する女船長の嬌態である。海軍将校の軍服のままただ快楽を貪る彼女には、日ごろの強い人というイメージはなくなり、麗しい女になっていた。

(翡翠海はぼくのものだ。イシスもぼくのものだ)

「どうしようもない独占欲が胸を掻き回し、気を昂らせたリカルドは力の限り、海水に浮くイシスの腰を前後させた。

まるで海蛇のようにのたうつ男根が、女肉を食い荒らし、思いのたけを解放させる。

「いつ、くつううううう——っ!!!」

笠が開き、肉棒が限界にまで育つ。そして、ドクンッドクンッドクンッとして力強い脈打ちとともに、海水よりも熱い液体が女体に注ぎ込まれていく。

「わたしも、あう、いくうううううう！」

リカルドに全身でしがみついているイシスが、甲高い叫声を放った。



「このまま根元までずっぽりと入れて欲しい？」

明らかに性的な紅潮を示す顔に、不敵な笑みを浮かべてスカレットが挑発してくる。リカルドが焦れているように、彼女だって焦れているはずだ。これが男女の駆け引きとか、我慢くらべというのだろうか。

欲しい、と言ったら負けだ。主導権を完全に奪われて、男としての性を完全に陵辱されてしまう。

「うふふ、どこまで我慢できるかしらね」

紅潮した顔で傲慢に見下ろしてくる女海賊の表情は、惚れ惚れするほどにセクシーだった。

このお姉さまになら、どこまでもついていきたいと思わせるカリスマが確かにある。

目を爛々と輝かせたお姉さんは、蹲踞の姿勢で少年の龟头だけを膣に入れ、両手で膝を掴んだまま、昂然とむき出しの胸を張り、白挽くように腰を回転させ始めた。

「うっ、くう！ ん、ん、あう！」

快感のあまり情けない悲鳴をあげる少年を、赤毛の女賊は舌なめずりをしながら見下ろしている。

クチュクチュと粘液の音がし、男根はもう半透明な愛液でトロトロだ。肉袋はもちろん、肛門まで滴ってきている。

（ス、スカーレットだって、すごい濡れているじゃん。まるでおしっこ漏らしたみたいだ。早く根元まで入れてよ）

喘ぐリカルドの心の声は言葉にならず、無言の視線となってスカーレットに届けられたはずである。

「さあ、どうなの？ あたしのオマ○コ欲しいの。それとも欲しくない。このまま抜いちやおうか？」

「——っ！」

スカーレットが心持ち腰をあげると、リカルドはまるで捨てられた子犬のような表情になる。

少しだが、肉棒のエラを女の鬘が擦りあげた。その気持ちよさは筆舌に尽くしがたい。

「ああ、待って。欲しいですっ！ ……根元までずっぽりと入れてくださいっ！！」

ついにリカルドは屈服してしまった。こんないい女に生殺しのまま責められるのはもはや耐えられない。

「うふふ、しょうがない坊やね」

我慢くらべに勝利したスカーレットは、蔑みの笑みを浮かべる。その笑みすらも魅力的だった。

「じゃ、入れさせてあ・げ・る♪ ……んほお」

熱い吐息でもったいぶった台詞を吐いた痴女はゆっくりと腰を下ろし始めた。血走った目で見つめる少年のまえで、恥汗にまみれた蕾の中に男根が埋まっていくな。

スカールレットはどこまでも意地悪な女だった。蹲踞開脚の姿勢のままゆっくりゆっくりと腰を落とす。

美しい太腿の内腿の筋がビクビクと痙攣している。

ねちっこく絡みついてくる粘膜が、絶えず震えている肉壁が、男根を舐め回し、エラに吸いついてくるようだ。

それは少年に自らの腔洞の心地よさを教えつけているかのようであり、逆に男根を味わい尽くそうとしているかのようだった。

焦れる少年を見下ろす瞳は、欲情に爛々と輝きながらも、高慢さを失わない。その瞳で見つめられているだけでイッてしまいそうなほどにセクシーだった。

「ほおら、奥までえ……ほおら、奥まで入っちゃったわよお」

官能的な鼻息を洩らしながら、スカールレットは男根のすべてを咥え込んだ。

高慢なる美女はM字開脚で少年の腰に座り込むと、腔壁がギューッとすぼまり、肉筒全体を搾りあげてきた。

「うろうろ！」

リカルドの華奢な身体が痙攣し、肉棒の膨張率が上がり、筒中をマグマが駆け上がる。

どぴゅっどぴゅっどぴゅっどぴゅっ……。

それはさながら砲弾のように、激しく打ち上げられ、女肉の最深部を打ち据えた。

「あんっ、あんっ、あんっ……」

突然始まった、少年ならではの液量豊かな射精。とてもついさきほど一発絞り取られたばかりとは思えない激しい水鉄砲を受けて、さすがの高慢なお姉さんも、顎を反らせて官能的な悲鳴をあげた。

少年の脈打ちが、そのまま女体に乗り移ったかのような痙攣をしている。

リカルドを焦らして遊んでいたスカーレットだが、先に幾度も絶頂し意識が飛ぶほどの強烈なクンニを食らった女体だ。ちよっとしたことと簡単に、再燃焼してしまう状態だったのだろう。

しかし、この絶頂は彼女にとって想定内の絶頂だった。取り乱すことなく、あくまでも余裕を持って絶頂を楽しんでいる。

少年の射精がひと段落したところで、官能的な吐息をひとつついて、口元に再び蔑みの笑みを湛える。

「あら、入れただけでいつちやったの？ さっき出したばかりだというのに、ほんと、早いね」

自分だっていま、一緒にいつたくせに、とは怖くて口にできないリカルドである。

女賊は、騎乗位のまま、少年の頬に手を当てた。

「きみみたいに、我慢の利かないオチンチンをなんて言うか知っている？」

「……」

「早漏って言うのよ。女に一番嫌われるオチンチンよ」

さすがにプライドを傷つけられ、鼻白む少年の顔を愉快そうに見ながら、スカールレットは楽しくして仕方がないと言いたげに、満面の笑みを浮かべた。

男根はまだ女肉の中に包まれている。一度の射精で多少は勢いを失った感があつたが、まだまだ小さくはない。そこをきゅつと締められた。

「我慢が利かない分、数で頑張ってもらわないとね」
スカールレットはじわじわと腰を持ち上げていった。

「くううう……」

いったばかりの尿道が抜かれ、鈴口が吸われる。ふたりの結合部から白い粘液が掻き出される。

「んふう……ほおら、もう一度、お、奥まで……」

再び腰が沈められた。肉棒が咥えられ、白い液体が溢れる。

くねった肉襞がねちっこく絡みつき、深く繋がれば、コリコリと肉エラを刺激される。膣肉の感触と粘膜の摩擦をしっかりと感じられるように、じつくりと腰を上下させなが

ら、淫婦が質問してきた。

「ど、どう……イシスよりも、あたしのオマ○コのほうが気持ちいいでしょ？」

リカルドはただただ頷いてしまっていた。

肉棒を包む膣壁の蠢き、キュンキュンと締めてくる膣圧はもちろん素晴らしい。しかし、そんな形状云々ではないのだ。男を感じさせるテクニックという意味では、間違いなくスカレットに一日の長があつた。

「うふふ、いい子、かわいいわよ。ご褒美にもっともっと気持ちよくしてあげる」

宣言すると同時に、スカレットは腰を力強く、そして素早く振るいだした。

「くっ、ああ、そんな、いきなり……」

まるで性感に翻弄される少女のような悲鳴をあげて悶えるリカルドは、反射的にスカレットの括れた腰を掴んでいた。

その手を、スカレットの手が押さえる。

「さあ、きみも突き上げなさい。エッチ好きなんでしょ。この助平野郎」

淫乱お姉さまに促されるままに、リカルドは腰を使った。

クンニのときは相手が油断していたから有利に立てた。しかし、本気になったときは、やっぱり、経験の差はいかんともしがたい。

いくら背伸びをしても、熟練した大人の女の技術に敵うはずもなかった。



主導権を完全に握られ、リカルドは牝肉の愉悦に泣き叫ぶだけだ。

「で、でるーっ！」

高速のピストン運動に、リカルドは三度精を放った。

しかし、スカーレットは解放してくれない。

「あはははは、もつとよ、もつと、もつとおー……」

類稀なる性器に扱かれれば、若肉は何度でも復活する。

リカルドは、スカーレットにしがみついて、腰を突き上げ続けていた。

「はあー、あああー」

痴女の情け容赦ない腰使いに晒されている少年は、あまりにも哀れだった。

先に自分がクンニでいきっぱなしにされたことへの意趣返しという意味があるのだろうか。

性戯に長けた女に弄ばれる、圧倒的な快感のまえに、頭の中が真っ白に焼けていた。

騎乗位で乳房を振り乱し、淫汗を撒き散らしつつ、腰を豪快に振るう美女は、その姿だけでこの上なく淫らで美しい。そのうえ、熱い贅肉に包まれた肉棒のほうも容赦なく扱き締め上げてくる。

男にもイキっぱなしという状態があるのだろうか、そそり立った肉棒がビクンビクンと痙攣し、止め処なく精液を出した。否、もう精囊には一滴も残っていない。すべて出して

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>